



改  
社  
版  
造

ゲ  
ー  
テ  
全  
集

(第廿八卷)

(長谷部製本)

昭和十三年二月十六日印刷  
昭和十三年二月十九日發行

(ゲ1テ全集  
第二十八卷)

編者兼  
發行者  
山本三生

東京市芝區新橋七ノ十二

印刷者  
植田庄助

東京市芝區濱松町一ノ十三

東京市芝區新橋七丁目十二番地

發行所  
改造社

振替東京 八四〇二番  
電話芝(43)自一一二一番  
至一一二四番



(所刷印堂文成)

## 解 説 (其の一)

色彩論綱要の本文の譯を終へて、何よりも先づ驚ろく事は、植物變化論との相似である。この事に就いて少し觸れて見たい。植物變化論を譯した頃、慘澹たる苦心をして書いた解説「ゲーテの植物研究の意義」なる一文に就いては、ある友人から色々の忠言を受けた。流暢な筆を持たない譯者は、我が身の不甲斐なさに齒搔ゆく思つたものだつた。今又とり出してこれを見たが、殆んど讀むに耐へぬ晦澁にも拘らず、色彩論に就いてこれを稽へると必ずしもすべてが間違ひだと唾棄される程のものでもない事を確めて、ほのぼのと夜が明け初めたやうな氣持になつた。あの論文の根底となつたものは「著書は自らの植物研究の歴史を傳ふ」(千八百三十一年)の一文であつた。その中の最高頂をなす三つの節の順序に暗示を得て書いたものだが、ゲーテが三節で書いたものを色々とひねくりまはしてかへつてわからなくしてしまつたのだ。罪滅ぼしの積りでもう一度振りかへつて見たい。

「變化的な植物形態の獨特な發展過程を私は長い間研究して來たが、今や私の心の中にはますます次の様な思想を呼び醒ました。即ち我等を圍繞する植物形態は根源的に確乎不動なものではない。執拗に種屬の自性を保持せんとするやうな頑固な所があるにも拘らず、寧ろ適當な變幻自在性と圓轉滑脱性が植物形態に附與されて居り、かくして地球上到る所に於いて、自體に影響を與ふる多くの條件に適合し、これに従つて自らの形態を形成し、又變形し得んとするのである。」（本全集二十六卷二百七頁）

執拗に種屬的自性を保持せんとする面は、リンネ等によつて代表される傳統的植物研究の對象であつた。それに對してゲーテは否定的態度をもつて臨む。そして植物の變幻自在性、圓轉滑脱性を強調する。種屬的自性と變幻自在性のこの對立に對して、「植物生理學豫備研究」からの言葉を借用して、前者を原子論的思想と呼び、後者を動的思想和名づけた。今、色彩論を読んで驚ろく事は、當時、確乎たる成算があつて用ひたわけではないこの原子論的とか動的の言葉が、此處に無數に用ひられてる事である。しかも、化學的色彩篇全體の構成を案ずるに、上に述べたやうな原子論的思想と動的思想の對立、對立と云ふよりは寧ろ原子

論的思想から動的思想への昇進が見られる。

「美はしき色彩論は在來凝滯孤立の原子論の中に幽閉されて居たが、此處から救ひ出して、色彩論を再び、現代の喜ぶ動的な躍動の大流に還し得たとすれば、知識のためにも、學問のためにも、或ひは手工業や藝術のためにも、慶賀に堪えない所である」(第五編、隣接的諸關係第七百四十六節)

この個所に、ぼつんと用ひられたと云ふだけならば、何も取り立てゝ吹聴する必要もない。否、ただ用ひられてるだけならば、そんなに興奮するのは滑稽であらう。さうではない。この對立を抜きにしては色彩論がわからないと思ふのだ。ここに色彩論の中心的な態度が見られると思ふ。植物變化論と色彩論との奇しき一致！ これを見て我々は驚かずにをられるであらうか。この問題に焦點を据えて、じつくりと説き去り、説き來たつて倦む所のないものは第三編、化學的、色彩である。これはゲーテの色彩論中最も體系的な努力を感じる部分であるが、そこに羅列された題目だけでも眺めるがいい。色彩喚起、昇進、極頂作用、平均作用、色彩圓の循環、逆轉、そして最後に固定。この題目を見ただけでも問題は色彩のメタモルフ

オーゼであることが感ぜられるであらう。今これを各章にわたつて説明すると云ふ事になれば、結局ゲートの述べたと同じ事を、しかもたど／＼しく書き立てる事になり、かくしては屋上屋を架する事になるから止める。本文に就いて見られたい。重要だと思ふ所には、一一原語を添へて原文の味を出さうとしたが、これは銜學のためでは決してない。

「ここで土地的差異が考慮される。谷地の濕潤で豊かに養はれるものがあるかと見れば、乾燥せる山地に生えて萎縮するものあり、或ひは思ひのままに暑さ寒さから守られてるものもあれば、嚴寒酷暑に不可避的に曝らされるものもあると云ふ風に、色々な土地的條件に影響されて、屬は種と變化し、種は變種に轉じ、變種も亦他の諸條件によつて無際限に變轉して行く可能性があるのである。併しながら無際限に變轉するとは云つても、植物は植物自體の領域を固守する。假令植物は一方では鑛石に、他方では動物に隣接はして居るにしても。どんなに懸け離れたものであつても植物でさへあれば、はつきりしたつながりがあり、これらの間の間隔をなくして同一種屬とする事も何の無理もなく出来るのである。

どんなに懸け離れたものでも、同一の概念の下に集結され得る事がわかるやうになると、しだいしだいにこの直観は、より高い方法で更に生命を與へられ得るであらうと云ふ事が私に明らかとなつて來た。これは即ち、超感的な原植物の感覺的形式と云ふ形で、その頃私の心眼に映つた所の一つの要求に他ならぬのである。私が認めたすべての形態の色々な變化を追求し、かくして私の旅の最後の目標たるシシリに於いて、すべての植物部分の根源的同一性が完全に啓示された。その後はこの同一性を至る所で追求し、再びこれを確認せんとつとめた。」

これは冒頭に掲げた敘述に接續して述べられた思想であるが、メタモルフォーゼに安住せずして、絶えざる變轉の中に確乎たる永遠の法則を求めんとする止むに止まれぬ欲求を中心として展開される。かくして把握されたものは「原植物」である。「植物部分の根源的同一性」である。ここに又再び原子論的な傾向が現はれる。これは前の場合に見られた原子論的思想とは異なるものではあるけれども、傾向としては同一の地盤に立つものである。これこそは求心力とでも云はるべきものであつて、ややもすれば無限の中に亡失せんとするメタモルフォー



一ゼの反対力となつて、これに加はる力である。求心力と遠心力とは、吸氣と呼氣の如くに  
縋ひ合はさつて、ゲーテ自らの研究態度を構成する。

今、色彩論に就いてこれを見るに、色彩のメタモルフォーゼの中に於いて、又もや再び確  
乎不動の法則性の把握を試みられて居る事は全く符節を合はせるが如くである。しかし考へ  
て見れば、何の不思議でもない。人間ゲーテの二つの面ではないか。第四編内の總觀は極め  
て短いものではあるが、その中に包含された思想は極めて重大である。これが色彩論綱要全  
體の中心思想であると考へる。生理的色彩、物理的色彩、及び化學的色彩の三篇を總觀した  
ものであるが、その敘述の形式は化學的色彩に據つて居ると考へる。それはさて置いて、こ  
の一篇を見ただけでも、變轉極まりなき色彩のメタモルフォーゼの中に、顯現する永遠の法  
則性が明白に把握され得る。

「色彩圓は我等の眼前にその姿を現はした。かくして色彩變化の複雑な關係が明らかとなつ  
た。色彩圓全體の基礎をなすものは、純粹にして根源的なる二つの對立的色彩である。次ぎ  
には昇進の作用があらはれる。二つの對立的色彩はこの昇進によつて第三の色彩に接近する。

かくして黄色の側に於いても、又青色の側に於いても、至高にして最深なるものが生ずる。

これは最も單一にして、しかも複雑を極め、最も廣く用ひられながらも、高貴無上の色彩である。次ぎに、この色彩圓に於いて表現せられるものは、二つの合一作用である（混合作用と云つてもよい、結合作用と名づけてもよい）一方は、單一にして根源的な對立的色彩の合一作用であり、他方は昂進を受けた對立的色彩の合一作用である」（七百七節）

黄色と青色との對立が昂進すれば赤となり、この兩端の昂進した二つの色彩が結合すれば眞紅となり、次の兩端が混合すれば緑となる。これ即ちゲーテの到達した終極のものであつて、「分極性と昂進」の名で呼ばれてゐるものである。即ち、根本現象の、色彩に於ける顯現である。これが開明のためにはゲーテは色彩論全部をもつてしたので。實に色彩論は根本現象の大歡喜の頌である。と云つても過言ではない。

「根本現象を究め得た時には、物理學者はその學問の極限に到達したのだ。即ち、彼は經驗的高峰の絶頂に立ち、そこからして越し方を省みれば、あらゆる段階の經驗を概観し得、しかも又行く手を望む時には、繰りひろげられたる理論の王國を、假令自らの足で踐む事が出

來ぬにしても、ともかくもこれを一望の下に收め得ると云ふ確信を持てる……」〔第七百二十節〕

「越し方を省みたもの」が第四編内の總觀であるとすれば「行く手を望む時に繰りひろげられた理論の王國」を説いたものが第五編隣接的諸關係だと見ていいと思ふ。これは極めて興味深い編であつて、ゲーテの大いなる意圖を、たとへ斷片的にはあるが、覗き得るやうに思ふ。

「自然を克明に觀察するものならば、他の事では如何にその見る所が違つても、次に述べる事ではその意見が合致するであらう。即ち、先づ分裂があつて、これが合一される場合と、最初に統一があつてこれが分裂するに至る場合と、二様あるが、現象するもの、乃至は、現象として我々にめぐり合ふものは、凡てこの二つの中のいづれか一つを必ず指示する。即ち現象凡てはその姿をこのやうに顯はすと云ふのである。合一せるものを分裂せしめ、分裂せるものを合一せしむる事こそ大自然の生命である。我々人間の生活し、活動し、存在する世界のあらはす收縮と擴張、結合と分離の永遠の相關關係、吸氣と呼氣の關係は畢竟するにこ

れを意味する」(第五編七百三十九節)

これは根本現象の普遍的敘述であるが、これを讀んで我々はここにも又植物變化論との一致に驚ろく。「意圖の敘説」に於いて高次的格率として述べられた言葉。「この獨立的にして生々躍動するものは、或ひは始めから既に結合し合つて居るものもあり、或ひは、見出し合ひ、結び合ふもある。これらの生々躍動するものは分裂し、展開しては再び求め合ひ、かくしてあらゆる方面に、又あらゆる方法で無限の生長をいとなむのである」と比較せられよ。

かく見來る時、内容の點に於いても色彩論と植物變化論の内の合致を確信し得る。尙この點に就いて詳細な比較を試みたいのであるが、これは割愛せねばならぬ。

併しながら、色彩論と植物變化論との同一性のみではない。七百三十九節に盛られた思想は、そこにも見られるやうに「自然」を貫ぬき「世界」を蔽ふものがある。ゲーテのこの大いなる意圖は仄かにではあるけれども、七百五十七節に書き表はされてる。「常に直觀を隨伴する象徴によつて根源的な自然現象を色彩論の方法に従つて相互に結合し、かくして本編に於

いては述べられはしたが、極めて漠然として充分にその意を盡さなかつたと思はれる事を余は將來何處かでもつとはつきりさせる事を誓ふ」第六編隣接的諸關係はこの言葉によつて結ばれて居る。極めて漠然として、充分にその意味を汲み取る事は出来ぬが、しかしゲーテの抱懐する大いなる意圖は感ぜられるやうに思ふ。

「世界」を蔽ふこの根本公式は、又必然的に人間にも通用せねばならぬ、第六編「感覺的にして精神的なる色彩の作用」はこれを示す。この編はそれ迄述べられたゲーテの色彩理論の應用的部分ではあるが、しかしゲーテ自らの立場から云ふならば、正にその逆であつて、具體的なこの世界に出發點を置いた事は「著者の告白」の中にも述べられて居る所である。それはともかくとして本編の最後の數節は、見逃し得ぬ重大さを持つと思ふ。九百十八節に於いては「最後に一言するが色彩も亦神祕的解釋を許すやうに推察せられる。その理由を述べやう。前に述べた圖式に於いては複雑な色彩關係が手に取るやうに示されて居るが、人間の思想並びに自然の樞軸をなす根源的關係は實にこのやうな圖式によつて暗示されるのである」

と述べられた。そして次の九百十九節「青色と黄色との乖離の状態、及びこの相對立せるものを相寄らしめ、かくして第三のものの中に結び合はせる所の赤色への昂進。讀者がこれ迄の余の敘述によつて先づこの乖離の状態を正しく把握したに止まらず、特にこの赤への昂進を心魂に徹する程に省察して來たであらうならば、恐らくは次のやうな、神祕的にして特殊な思想が心中に頭を擡げるであらう。即ち、この二つの相乖離し、相對立するものには、精神的意味があたへられはしないかと。次ぎには、相對立する黄と青とが下部に於ては緑を現じ對立の上部に於ては赤を醸し出すのを見る場合、緑に於てはエロヒームの地上の所産を、赤に於てはエロヒームの天上の所産を想起せざるを得ぬであらう」この敘述の最後の個所を讀んで「詩と眞實」第二部第八卷の終りを飾る、若きゲーテの宇宙觀を想起しないものがあらうか。あそこに述べられた「人間思想並びに自然の樞軸をなす根源的關係」は實に上述の如き圖式によつて暗示されて居ると思ふ。

永恒以來自らを創造する神とルーチフェルとの乖離。この害惡はルーチフェルの「一面的傾向」から生じた。即ち「よりよき半面」が缺けて居たがために起つた事なのである。「即

ち自我集中によつて獲られる凡てのものを、創造物は所有して居るが、自我擴大によつてのみ作られるすべてのものがないからである。かくして、全創造物は絶え間なき自我集中によつて疲れはてて、父なるルーチフェルと共に自己を滅ぼし、神と等しき永遠性をもたんとする彼等の要求權は、根こそぎ亡くしてしまふかもしれない有様であつたのである。この状態をエロヒームは暫くの間凝つと見守つて居た。その場が再び蔽ひ清められ、エロヒームの新しい創造のための空間となるであらう永劫の未來を待つべきか、それとも、この眼の前に見られる事態に干渉の手を差し伸ばし、自らの無限性に従つて、この缺陷の補足をはかるか、その選擇はエロヒームに委された。エロヒームは後者の道を選んだ。即ちルーチフェルの行爲の結果がもたらした凡ての缺陷を、自らの一存で、一瞬の中に補つたのである。エロヒームは無限の存在にたいして、自己擴大の能力、即ちルーチフェルの行動とは逆に動く能力を興へた。生命の本然の脈搏が恢復された。従つてルーチフェル自身もこの力の働きから逃れる事が出来なくなつた。これが、光として知られるものの現はれた時期である。換言すれば、創造と云ふ言葉でよく表現せられるものの始まつた時期である。さてこの創造が、エロヒ

ムの活動して止む事なき生命力によつて徐々に複雑化せられたけれども、未だ神との根源的な結合を復活せしむるにふさはしい一つの存在が缺けてゐた。かくして人間が生れたのである。……」

此處には又、分極性の根本法則が壯大なる姿をとつて表現された。嗚呼！ だが、「こりや狂信だ、などと飛んでもない嫌疑を掛けられぬやう」に、余も又要心しなければならぬのか。

昭和十三年二月七日

村 岡 一 郎



## 解説に代へて（其の二）

「色彩學史のための材料」全篇のための解説は、翻譯完結の下卷に約束される。個々の問題に就ては、出來得る限り精細に、本篇の註解として述べてあるのであるから、これらの註解の綜合が、下卷の解説となつて現はれる事にならう。

この著述の讀者に對して、ディルタイの、*„Die Metaphysik als die Grundlage der Geisteswissenschaften, Ihre Herrschaft und ihr Verfall“* の併讀をお薦めしたい。譯者は、この論文によつて、我が「色彩學史」の理解に、極はめて多くの示唆を受けた事を、告白しなければならぬ。

おそらくは古今東西を通じての、少くともゲーテの時代に於ては、その類を見ざる、最善の此の科學史の著者が、ディルタイの歴史の理解に、人々の推量する以上に、大きな影響を與へた事と思はれるのである。